

司式: 鮎川 健一
奏楽: 吉田千鶴子

前奏: 「天にまします、われらの父よ」 (G. ヴェーム)

招詞: 神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(I テモ 3:15b)

讚美歌: 3「扉を開きて」

交読詩編 34:1-1 (アルファベットによる詩)

- 01 【ダビデの詩。ダビデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに。】
- 02 どのようなときも、わたしは主をたたえわたしの口は絶えることなく賛美を歌う。
- 03 わたしの魂は主を賛美する。貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。
- 04 わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう。
- 05 わたしは主に求め主は答えてくださった。脅かすものから常に救い出してくださった。
- 06 主を仰ぎ見る人は光と輝き辱めに顔を伏せることはない。
- 07 この貧しい人が呼び求める声を主は聞き苦難から常に救ってくださった。
- 08 主の使いはその周りに陣を敷き主を畏れる人を守り助けてくださった。
- 09 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。
- 10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。
- 11 若獅子は獲物がなくて飢えても主に求める人には良いものの欠けることがない。

朗読聖書①: イザヤ書 57:14-21

◆へりくだる者の祝福

- 14 主は言われる。盛り上げよ、土を盛り上げて道を備えよ。わたしの民の道からつまずきとなる物を除け。
- 15 高く、あがめられて、永遠にいましその名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にありへりくだる霊の人に命を得させ打ち砕かれた心の人に命を得させる。
- 16 わたしは、とこしえに責めるものではない。永遠に怒りを燃やすものでもない。霊がわたしの前で弱り果てることがないようにわたしの造った命ある者が。
- 17 貪欲な彼の罪をわたしは怒り彼を打ち、怒って姿を隠した。彼は背き続け、心のままに歩んだ。
- 18 わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、休ませ慰めをもって彼を回復させよう。民のうちの嘆く人々のために
- 19 わたしは唇の実りを創造し、与えよう。平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。わたしは彼をいやす、と主は言われる。
- 20 神に逆らう者は巻き上がる海のように静めることはできない。その水は泥や土を巻き上げる。
- 21 神に逆らう者に平和はないとわたしの神は言われる。

朗読聖書②: マタイによる福音書 5:1-3

◆山上の説教を始める

01 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。02 そこで、イエスは口を開き、教えられた。

◆幸い

03 「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

祈祷

全てを造られ御支配なさる父と子と聖霊なる三一なる神さま、聖名を褒め称え賛美致します。この新たな日、あなたの息吹を受けて、導かれ、この礼拝の場へと招かれましたことを感謝致します。

殊に今朝は、聖霊降臨日を迎えてから教会の出来事が興されたことを思い起こしつつ、信濃町教会 100 年の歴史と共に、明日 24 日には日本基督教団設立をも覚えます。日本の戦時下において、キリスト教会が迫害と、また試練の中に置かれていました。しかしその時における最善の道として 30 余の教派・教団を一つとし、プロテスタント最大の合同教会として新たに出発しました。様々の教派の歴史的、また信条的な特質を受け継ぎながらこの 83 年の歩みを迎えましたことを覚えます。合同教会への課題もありますけれども、恵みも多く、主に連なる者として“告白は一つ、証しは多様にある”ことを糧に、宣教の業が豊かなものとされ、この世に主の証人としてあり続けますように願います。

また先週には、二人の姉妹を天に送りました。あなたが定めた生涯の歩みを全うし、御許へと向かわれたことを思います。ご遺族の方々、関係者の方々に主の特別な御顧みと慰めがありますように。

その中で、過ぐる一週間、御心に反することも興り、至らぬこと多く覚えます。それでも主なる神は御心によって私たちを祝福の内に置き、必要な物を備えてくださいました。その全てを受け留めることが出来ない私たちでもあり、主の御心から遠く独り歩きを続けていた日々にも思います。今にも浮かぶ消えざる弱さを自覚し、悔い改めを申し上げます。どうか主の御赦しの内にありますように。主の御自愛にありますように重ねて祈ります。

また、今なお感染症の心配もある中で、同時にライブ配信により礼拝を共に献げている友のことをも覚えます。また日々の務めの中で祈りを献げている友のことも覚えます。共に真の生ける神の御光の内に歩む者とされますように、御霊の導きと御助けを願います。

この世の力に鬱積する私たちは主の御力なる聖霊の導き無くしては一步も前に進みません。聖霊なる神の息吹により私たちは新たに生きる希望へと導かれ、心清められ、また癒されます。主の御助けを求めつつ、世界の平和、日本の平和のためにも祈ります。戦乱、混乱が絶えない日々です。また自然災害の猛威も覚える時にもあります。世界の揺れ動く中、どうか主を覚え、主に信頼し、主の御心を受け留めつつ、日々の歩みを重ねられますように。

思い悩む一人ひとりの上に主の慰めと癒しが特別にありますように。共に主を見上げ、主の平和の道を歩めますように。信濃町教会の宣教の一端を担う私たちの歩みも主が顧みてくださいますように。

これより語られる主の御言葉が御霊の導きと共に私たちの心に深く届き、新たな命と共にここから遣わされていきますように。

これより続く教会の業が豊かに祝され用いられますように。マラナ・タ(主よ、来たりませ)と祈り願い、主のみ国が来ますように、主の平和を求める信仰の友の祈りに合わせ、救い主なる御子イエス・キリストの聖名によって御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌: 57「ガリラヤの風かおる丘で」

説教「心の貧しい者は幸い」

佃 雅之

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。(マタ 5:3)」今朝の私たちに与えられました御言葉は、聖書を読んだことのない方でも“聞いたことがある”と言われるほど有名な箇所です。キリストの『山上の説教』が

この個所から始まります。神の支配、神の恵み、神の愛が、この世界に入ってきたことを告げる言葉、キリスト者の生き方、キリストの弟子の心得が纏められています。

私たち信濃町教会は、6月2日にお届けした教会創立100周年を記念する礼拝において、キリストの証人として全ての民をキリストの弟子にするために新たに出発することを確認しました。そのためには今一度、主が語られた言葉から、私たち自身がキリストの弟子としての生き方を聖書に聴く必要があると思います。

この福音書を書いたマタイにとって「山」という場所は、特別な場所であることはこれまでも何度か触れたかと思います。「山」はキリストの祈りの場所であり、多くの人たちを癒す場所であり、今日の個所のようにキリストの教えの場所でもあります。更には復活のキリストが弟子たちに出逢い、どのように生きるべきか、何を為すべきか、弟子たちに使命を与えた場所です。

第一福音書記者マタイが「山」をキリストの説教の舞台としたことにはもう一つ意味があります。「山」の上で神が語る、ということから思い起こされるのは旧約聖書に記されているモーセがシナイ山で主なる神から十戒を与えられた出来事です。十戒を基礎にしてイスラエルは神の民として整えられていきます。シナイ山での契約と律法の授与がイスラエルの歩みの基礎となりました。マタイは、神がイスラエルの民に与えられた律法がキリストによって成し遂げられることを伝えようとしています。つまりキリストによって聖書の言葉が真実であることが分かるということです。福音書記者マタイにとってキリストは律法の完成者であります。『山上の説教』によって、新しいイスラエルの民の基礎が据えられます。ここで語られるキリストの教えが、新しい神の民である教会の基礎になるということです。

『山上の説教』は九つからなる「幸い」の教えで始まります。「幸い」とは「マカリオン(μακάριον)」というギリシャ語の訳です。「祝福されている」という意味を持つギリシャ語が使われています。聖書が「幸い・祝福」と言うとき、私たちが先ず思い起こさなければならないことがあります。「幸い」とは「人間が自分の力によって追及して獲得するものではなく、私たちが神の御意思に従って生きようと務める時に神から与えられるギフトである」ということです。神との人格的な深い交わりによってもたらされる喜びが「幸い」なのであります。イエス・キリストにより、私たち信仰者は、神の命そのものに与るようになります。神との深い交わりを持たない人たちの幸福は、この世の人生の様々な出来事や変化に依存しています。しかし、私たち信仰者に与えられる祝福は、この世の変化には依存しません。私たちが神から与えられる「幸い」は、何者も私たちから奪い取ることの出来ない喜びであります。今朝は、先ず3節にあります最初の「幸い」に集中して聴きます。

「心の貧しい人々は、幸いである」、大変よく知られている言葉です。文語訳の「幸福なるかな、心の貧しき者。天の国はその人のものなり。」と、覚えている方も多いことでしょう。まず初めに、「幸福なるかな、」この言葉が先に来る方が原文(Μακάριοι)に忠実に訳されていると言えます。キリストは集まって来た群衆と近寄ってきた弟子たちを見ながら「幸いだ」と語り掛けています。主に従って来る人を見て、“あなた方は何と幸いなことか、心の貧しいあなた方は、何と幸いか”と語られているのです。私たちなら、この主の言葉をどのように聴くでしょうか。多くの人は「心の貧しい者は幸いだ」と言われても、祝福された人生とは正反対に思えて、「幸い」とはとても思うことは出来ません。

貧しさが祝福であることに同意できる人はほとんどいないでしょう。貧しさは人間の幸福を妨げる原因になることが多く、貧しさによって幸せや自由が破壊されるということは少なくありません。

ここで、見落としてはならないことは、この教えが誰に対して語られているかということです。1節に「イエスはこの群衆を見て山に登られた。腰を下ろされると弟子たちが近くに寄って来た」とあります。単なる情景の描写ではありません。キリストの傍で説教を聞いているのは「弟子たち」です。キリストの弟子とは、キリストに呼び出され、召されて従った人です。そしてそこには「群衆」もいます。この群衆たちは、今日の個所の直前、4:25に語られている通り「イエスに従った」人たちです。つまり『山上の説教』はキリストに従って生きようとしている人たちに与えられた御言葉なのです。「イエスをキリスト・救い主である、神の子である」、この事を信じることなしに、ここでの説教を聴いても、語られていることの意味は分からないということです。

私たちもそうですが、誰もが人生のどこかで一度は絶望を体験しているはずです。“このままでは、今のままの自分では駄目だ”と考えて、“もう参りました。降参します。助けてください。”と神の前に跪いた人、根本的な自分の姿を認めて、神の前にありのままの自分の弱さや情けなさを告白して、「心砕かれる」体験無くして真の弟子とはなれないものです。自分のような罪ある者がキリストによって罪赦されるという喜びを掴んだ人が真の弟子となっていくます。

新約聖書の書かれたギリシャ語で「貧しい(πτωχός)」という言葉は「完全に無一物の人」を言う形容詞です。“流浪の人、施しに頼り、富みも、影響力も、地位も、名誉も全くないも持たない、卑しく苦しむ無力な人”を表す言葉です。ギリシャ語では、この言葉よりも、もっと屈辱的な意味を持つ言葉を見つけることは困難だと言われています。しかしキリストは、ギリシャ語で山上の説教を語ったわけではありません。キリストは日常使われていたのがアラム語でした。アラム語の根源は旧約聖書にありますから、ヘブライ語に置き換えなければ本当の意味を汲み取ることは出来ません。ヘブライ語で「貧しい(א-נין אֲנִיִּין)」という言葉は、信仰的に特別な意味を持っています。この世において頼るべきものがなく、神にのみ完全に信頼して、神に自分を全く委ねている状態、貧しく、謙虚で、信仰深い人々に用いられる言葉です。キリストが語られた「貧しい」という言葉は、“自分だけでは人生を生き抜くことは不可能である”ことを知った人のことです。

ここでキリストは、「心の貧しい人々」と言われています。「心が貧しい」と言われると、「心が弱い、心が狭い、心が病んでいる」と言われているようにも聴こえます。しかし「心」と訳されている言葉はギリシャ語で「プニューマ(πνεῦμα)」が使われています。「プニューマ」、「霊」ですから、神との関係のことです。神から息を吹き入れられて生きる者となった私たちの命のことです。“霊的な命の貧しさに気づいて自分の無力さを知り、神にのみより頼む人、神に縋りつき共に生きようとする人、そういうあなた方は幸いだ”と言っているのです。

本日与えられましたもう一つの御言葉、旧約預言者のイザヤも15節で同じことを言っています。「打ち砕かれてへりくだる霊の人」というのは、まさに「心の貧しい人」のことです。「へりくだる霊の人」というのは、“自分の罪の深さを認めて罪を悔いる人”です。“自分は罪を犯してはいない”と思う人もいるでしょう。しかし聖書が言う「罪」とは、元々「的外れ」、「目的を見失う」という意味ですから、神を神としない、神に背を向けている状態を「罪」と言います。“神など居ない、神などあてにしないで、自分は自分の力だけで生きていける”と思う高慢こ

そがあらゆる「罪」の始まりです。

キリストが山上から「貧しい人は幸いである」と語るのは、“心の貧しい者は自分の無力さ、虚しさを知っている人、自分の持っているものに頼らない人、そのために神を知ろうとして神に近づく者は幸いだ”と言うのです。限りなく高い所に住まわれる神は人間の能力や地位などは全く気に懸けられません。むしろ塵にすぎないのに何か偉い者であるかのように高ぶる人を嫌います。自分の小ささ、弱さ、罪深さを認めて謙^{へりくだ}る人を愛し共に住まわれるのです。神は「へりくだる人」の心を励まし、立ち上がる力と新しい命を与えてくださいます。

人間は本来誰もが一人残らず「貧しい者」です。神との関係において霊的に乏しいのです。しかし自分の貧しさに気づいていない人が多いのです。神の霊によって生かされていることを知らずに、自分の力で深刻な貧しさから何とか脱しようと思っています。豊かになることが、幸いを得ることが自分の努力で可能だと思っているところがあります。しかし主の目から見るなら、才能や家柄、学歴、財産、仕事、資格、出世・名誉、人間の抛り所としているものは、何も「幸い」とは言えません。獲得するまでは神に抛り頼んで、手に入れて、満足したら神を背けてしまうこともあるでしょう。地上のものはやがて廃れます。或る日突然奪われてしまうこともあります。この世の富という物質的なものの本質的な特徴は、それが不安定だということです。物質的なものの中で失われないものは何もないからです。大切なことは、今、主なる神から与えられているものを、感謝をもって受け取っているかということです。神はあなたの外面を見てはいません。常にあなたの内面、あなたの心を見ています。私たちは自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたいのです。イザヤ書も次のように書いています。21 節「神に逆らう者に平和はないとわたしの神は言われる。」神との正しい関係を持つこと、神の祝福を受けること。私たちの幸せというのは全て神との関係にあります。キリストと出逢った者が先ず獲得するのはこの神の霊です。『山上の説教』に述べられている生き方は、人間が努力して自力で歩むという道ではなく、キリストを通して神の霊である聖霊を受けて、聖霊に導かれて歩む新しい生き方です。

教会ではこの一週間に二人の姉妹の葬儀を礼拝堂で執り行いました。召された姉妹たちは信仰の道を歩み通され、最後の礼拝を愛する方々と共に献げることが出来たことを喜ばれていることでしょう。お二人とも、“私には何もありません”と全て主に明け渡し、主に信頼して主に喜ばれる「心の貧しい者」となって天国に旅立たれました。主は、ご自分に信頼する者を、抛り頼む者を喜ばれて天の国に向かい入れてくださいます。“幸いな者よ、あなたがたはなんと幸なことか”と、“あなた方にわたしの命を与える”と語ってくださっているのです。

私たちは全てを主に委ねることが出来る幸いな者です。私たちは生きている時も、死ぬ時も、主のものとして、しっかりと捕えて戴いています。神に赦され、受け入れられているのですから恐れることはありません。神が共に居てくださる、神が共に生きてくださる、聖霊によって導かれる生活は正に神の国、神の支配の経験(敬虔?)です。神に支配して頂いているという経験を地上にあってできる者こそ幸いなのであります。キリストの幸いであるという祝福の言葉は、何時の日にか、何処かで、誰かに興ることを言っているのではなく、今、此処に集う私たちに向けられています。今日、キリストのもとに集められた私たちこそ幸いな者なのです。

お祈りを致します。

聖なる神、あなたの憐れみによって私たちは、主にこそ頼り、全てをお任せすることが出来ます。この信仰による幸いを感謝致します。しかし、私たちは時に自分の欲することを優先して自分の道を行こうとするものです。どうか私たちが打ち砕かれて、謙った霊の人となることが出来ますように、聖霊が私たちの内に働き、私たちの心を新しくしてください。主の祝福のもとにある人生であることを信じて、感謝してこの週も歩ませてください。

二人の姉妹を、あなたの御国へと送りました。あなたが与えてくださった信仰によって、祝福された生涯であったことを心から感謝致します。姉妹たちに真の平安を与え、残されたご家族をあなたが慰め、守り導いてください。主の聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌:461「みめぐみゆたけき」

献金・感謝の祈り(中川真明)・主の祈り

天の父なる神さま、あなたの大きいなる聖名を賛美致します。どうぞ御国を来たらせてくださいますように。

聖霊降臨第6主日の今朝、私たち一人ひとりの名前を呼んで教会へと集め下さり、またライブ配信を通しまして、神さまに礼拝をお献げすることが出来ましたことを心より感謝申し上げます。

敬愛する佃牧師を通して、私たちキリスト者としての生き方、また神さまの前に謙り歩むこと、主に信頼すること、主により頼んで歩むことで私たち、新しい道が与えられますことを、今日改めて知ることが出来ました。どうしても私たちは自己中心的になってしまい、神さまの御旨から、お考えから離れてしまうことがあります。どうか悔い改めつつ、神さまを仰いで、そして隣人と共に歩んで行くことが出来ますように、上よりのお導きをお願い致します。

今日は特に、この後、教会創立100周年を覚えて講演会のひと時を持ちます。語ってくださる笠原先生を強めてくださいますと共に、先達がこの信濃町の地において、宣教を続けて来たこと、この地での宣教の大きな意味について考えるとともに、これからの100年の私たちの宣教の歩みについて、どうか考える大切なひと時となりますようにお導きをお願い致します。

私たちは沢山の物を神さまから戴いております。今、その一部を献身の徴としてお献げ致しました。どうか、神さまが活かしてそれを用いてくださいますようお願い致します。

イエスさまが、私たち一人ひとりに教えてくださった「主の祈り」を共に祈って、この新しい一巡りを始めることが出来ますように。…アーメン。

派遣・讚美歌91「神の恵みゆたかに受け」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)週報修正:教会学校担当綿引道子 (2)案内:次週大掃除について

後奏:「我らみなひとりの神を信ず」(G.F.カウフマン)